

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 成果（児童生徒）

ア 見通しや目標をもち、計画的に学習を進める児童生徒の増加

「AARサイクル」を意識した教育活動を工夫し実践を重ねたことによって、児童生徒は、学校行事や学習に対して見通しや目標をしっかりともつことができるようになってきた。それにより、計画的に学習を進める児童生徒が増えた。

イ 自ら「AARサイクル」を回し、夢中になって学習に取り組む児童生徒の増加

授業の中で、自ら「AARサイクル」を回すことによって、学ぶ楽しさやよさを味わうことができた。夢中になって学習に取り組む児童生徒が増えた。特に、高等学校では、「R（振り返り）」から「A（見通し）」を意識し、次の単元での自身の学び方について考える生徒が増えた。

ウ 自身の成長を実感し、学習に自信をもつ児童生徒の増加

「R（振り返り）」を積み重ねてきたことで、自分自身の成長に気付いたり自覚したりすることが増えた。これにより、学びに対して自信をもつ児童生徒や、学習に前向きになる児童生徒が増えた。

(2) 成果（教師）

ア 児童生徒が「どのように学ぶか」を意識した授業づくりや研究協議に取り組む教師の増加

児童生徒が「AARサイクル」を回すための工夫をしていく上で、児童生徒が「どのように学ぶか」を意識した授業づくりを行う教師が増えた。特に小・中学校では、児童生徒が「どう学んだか」を中心にした研究協議に取り組む教師が増えた。

イ 小さな「AARサイクル」に注目し、展開を工夫する教師の増加

授業実践を重ねてきた中で、単元全体の大きな「AARサイクル」に加え、1時間の授業の中の小さな「AARサイクル」が重要であることが明らかになった。特に小・中学校段階では、教師が小さな「AARサイクル」を回すための手だてを講じることで、児童生徒の学びを深めることができた。

ウ 「R（振り返り）」から「A（見通し）」を意識した授業実践と分析を行う教師の増加

特に高等学校では、教師が「R（振り返り）」から、次の「A（見通し）」のつながりを意識した授業実践を数多く行い、生徒の学びの変容を分析することができた。

(3) 今後の課題

ア 「R（振り返り）」から次の「A（見通し）」へつなげるための教師支援の在り方

高等学校では実践と分析を行ってきた部分ではあるが、「R（振り返り）」から次の「A（見通し）」へつなげるための教師支援の在り方を検討する必要がある。学校の実態や児童生徒の発達段階に沿って、児童生徒がより自覚的に、「R（振り返り）」から「A（見通し）」へと学びをつなぐための方法を探っていく必要がある。

イ 大小の「AARサイクル」の関連性についての検討

単元全体や単元と単元を結ぶ大きな「AARサイクル」と、1時間の授業や、授業の中の一場面における小さな「AARサイクル」については、その関連性を明らかにすることが必要である。

6 おわりに

各研究協力校の実態に応じた実践や研究協議を基に、「自ら学ぶ力」を育成するためには、児童生徒が学習に見通しをもつこと、学習方略を身に付けること、振り返りを行うこと、それをまた次の学習への見通しへとつなげていくことが大事であることを確認し、各学校で試行錯誤を重ねて有効な手だてが明らかになってきた。また、単元全体を通した「大きなAARサイクル」だけでなく、1時間

の授業や学習場面においても「小さなAARサイクル」を回すことが、児童生徒の自ら学ぶ力を育成していくために重要であることが確認されたことは大きな成果と言える。

今後は、実践を通じて得られたこれらの成果を、広く学校現場に還元していくことが重要である。本研究の中で、各研究協力校が実践してきた事例を基に、学校における児童生徒や教師の実態把握の仕方、自ら学ぶ力の設定の仕方、段階図等を用いた実践の仕方等をリーフレットや出前講座等を活用して普及していきたい。